

蠶養法教流集目錄

桑樹と化り益ある事

蠶種子見様の事

蠶種毒忌の除根と夏

種子に寒水に漬らす事

養蠶法道具と事

蠶生息出る時と得の事

最初榎を以て蚕掃屋仕法のみ

蠶ふ大小出来ざるを得のみ

蠶獅ふれ糸起し入道のみ

繭代化らば仕極く事

繰取極く事

其端仕立極く事

蠶養教諭集

人皇三十二代用明天皇此清宮又聖德太子弟

機の改試輔け氏之儀と書卷を乃御と教へ給ひし事

舊事本紀の皇太子太子回蚕成書云父母此

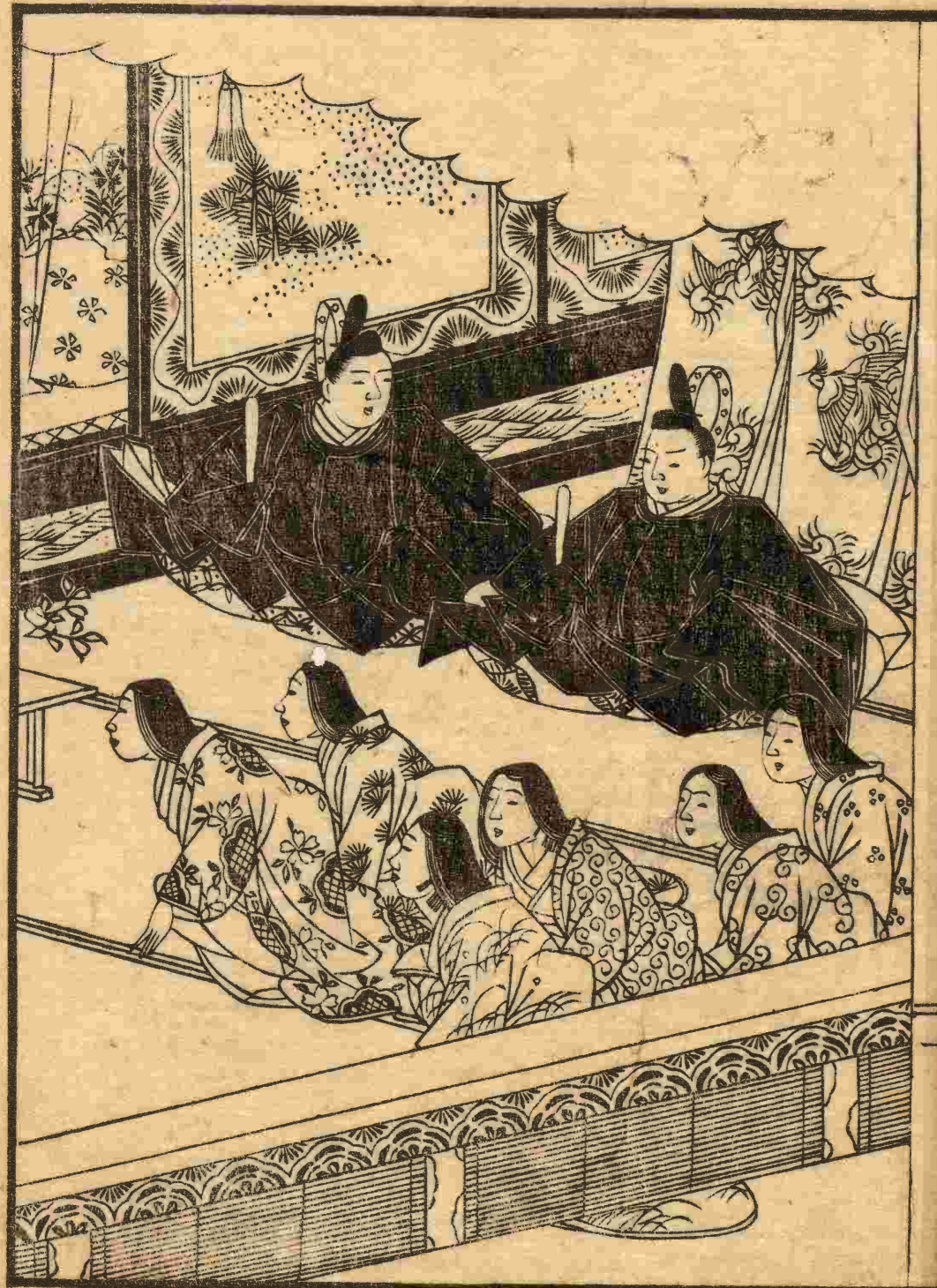
赤子を育つるごとく蚕成思ふ事我子と思ふ

おとせし寒暖陽氣の加減平生我身分不徴

ひく温かうば冷かうば平和たる様陽をせし

アタカ

ヒキカ



蚕夜回の多く精力がつくことと行(給ふ)

素樹と作の益ある事

昔も草木三草を桑八草としてあり桑は日本のに
して各本あり桑の作り種は屋敷より谷の上或は
畑地にて耕作もありが土に土に栽て生る本あり又
川端あばひと種を川除やひらなる土地の砂地亦
土に栽て生る事ありと云ふ裁はばけり此向成
土に栽て生る事ありと云ふ裁はばけり此向成

長年養蚕の秘事を賞しむるは花野

代園武川縁の奥ありと云ふ各碑地とも蚕

と書ひて莫老の利淫と得る事多し尚書大傳云

天子諸侯の公桑蠶室ありと云ふ史記の

行國を多く女は業にして男の多しと書きたる耕

地の餘力不替て種も大令は得る事滋養民の

物成國家と潤と身一なる七唐土の中にも五成完

樹々以棄とて之を統りよむるを以てせざる
國の荒地多く亦用の及ばず徒に空地と
なる歎とすまはざるや是よりくはやく
養蠶の道とて之を國中て申すべし尤
領方功若此人の年々利徳を得その餘りて
田畑多く持たるるの荒地とて申すべし
百姓ありて一家とて粒のあまじきや一村

一郷かくの如くならせむ玉の豊からず春和
のおとくは又理並安氏に志替と謂つた

蠶種ふ人種のみ事

種子随分揃く而一格として生氣強く卵は
中よりくばを種に合能くある蠶のものを
種子のちりし能く知ると其のちりし扱ふ種を
紙ふうり取付しと最ととあらざし種は其の蠶を

種
見
図



撰分^{あつりわけり}を^{てん}様^{さま}へ^{むく}と^な付^けて^{あつ}撰^り出^だし^{てん}と^よ中^{ちゆう}下^げ

とは分^{わけ}ふ^ちかり^り能^よ様^{さま}の^さの^りも^あ並^{なら}み^あり^ある^るを^{てん}様^{さま}の^た

ね^げ中^{ちゆう}並^{なら}み^あり^ある^るを^{てん}様^{さま}の^た色^{いろ}の^た其^{その}土^{つち}地^ぢの^た精^{せい}氣^き種^{しゆ}

に^あり^ある^るな^らり^ある^る赤^{あか}土^{つち}地^ぢに^ある^る青^{あお}土^{つち}地^ぢに^ある^る赤^{あか}土^{つち}地^ぢに^ある^る青^{あお}土^{つち}地^ぢに^ある^る

色^{いろ}と^あら^らう^う又^{また}黒^{くろ}土^{つち}地^ぢの^た赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た

と^あら^らう^う赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た

と^あら^らう^う赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た赤^{あか}土^{つち}地^ぢの^た青^{あお}土^{つち}地^ぢの^た

小かろしうず何國りぐく少くも地面ぢめん宜よろき川かみ為此
 場所ばしよへ上素じやうそ以作つくり或あるの素又すゑののれ素すゑをどは
 飼方かいほう此こゝ本法ほんぽうをありて書かひて蚕まの上うへ菌きんよて出いす
 蝶てつと撰せんをとりし種しゆと名なととれそ次つぎの種しゆと場ば服ふく
 身みの切きり又またのいろ種しゆ或あるのあり種しゆをどく色いろと此こゝ身み
 名なあり又また蛾かの性しやうをこれと名なととれそ次つぎの表あは飯いの色いろ
 似にたりと名なはもくとも性しやうよと蛾かの白しろ飯い

のやとあり法しやうふそととまをと取とらんと思おもひ
 第一だいいち種しゆ子こ此こゝ善ぜんりくと吟ぎん味みをきりりたるも白しろ
 の中なかつの蚕まうとるも一いつ所しよは純じゆんりしたまもあり是こゝ
 代しろ糸いとよとる時ときのゆ多く出い来き糸いと甚しん烈れつととる
 是こゝと除のぞきしてまゝふとるは太おほ菌きんと取とり種しゆ子こ
 玉たまより出い来きと数かずけ種しゆ子こを求もとめんと望もち身み
 蚕ま不ふ搦なくとと化くわととありて大おほまも多く出い来き

らつらり是とぞう種も又いご病種もい色とれ
具名あり随分種えと吟味して上種と求む
まの蚕の種教ぬるといふも今本物小虫う飼ふ
所れ白繭蚕の寝及眠り寝及起さ日教九日七
八より半日餘あつてすゆとほくふ蚕の項小國ふ
のいの字つら又黒斑色は蚕あり又黄なるもと
ゆら蚕ありこれとまんこといふ又所夏とら白さ

春蚕つら三日餘あつて繭化ふ是のまの白此の
種く繭もよる十日餘あつて蛾生と是夏蚕の
親ありけもつて蛾とわく夏蚕の種を取り又夏
蚕めて種と出せば明年のまは夏といふ白蚕
此種つら凡繭又長短凡角尖等れ形は蚕
すゆと成て日教十七八日つて朝あつて時小蛾出
雄の飛ふ雌の係く種なり是を撰合て交合させ

朝の付より魚ハ付まで合せ置く
 雄ハ控て雌を床とさせ紙の卵と産せ種と
 なるを蛾を羽とて凡卵と或は又控後産と
 り雄ハ又日とて死と雌ハ二三日飛て死とす
 頭を蚕ハ油の中なる踊蹴ハ行がて七八日
 と種を長サ或歩半ハ黄となる虫と化し
 出らば少ハ蛾也と縁又取がて去揚となす也

糞種毒忌の好極し中

糞水と後ハ紙袋に入是氣は籠らぬ中ふし
 夏より翌年の暮まで冷し新(狗糞)種に
 史(油)種氣多系粉の乾結はる茶麻の子
 樟腦大毒たり又種ふけ並魚うん或ハ蚊帳
 帷子に包いと大糸等ハ竹燈のよまはりし種ハ
 蚕也と云の惣ておのゝ糸と物不入たうん

春どよ
 袴ひ並り
 図



日の所々新焼火の通所へ並り忍く如てあ
 けき白ひと忘ひらる

種子以寒水漬る事

種と寒を以漬ふは中へ毒氣をぬくため又一

説ふ性弱き卵の生息と性強きもの生れ出る故

春生氣はうらまの又の年六月水風のと死

痛ぢしとり新ふる漬る固むりみづよ

漬ふときの大ごみ
 に漬ふて入漬を
 日敷の凡七八日ほど
 漬ふたうのまをまつ
 上は朝の程氷にと
 合りのちう其とき
 漬ふた付ふ日和さ

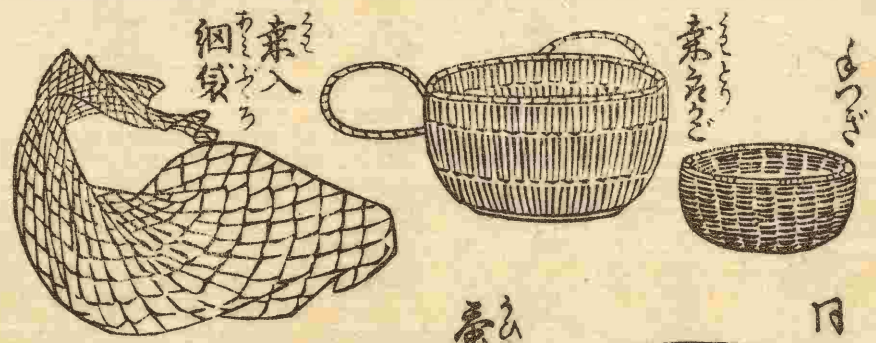


漬ふ
 大ごみ
 日敷
 凡七八日
 漬ふた
 付ふ日和さ

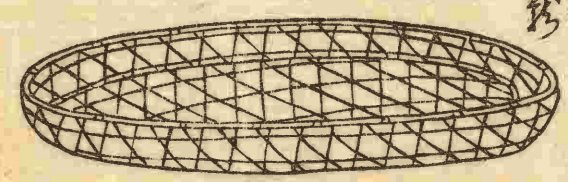
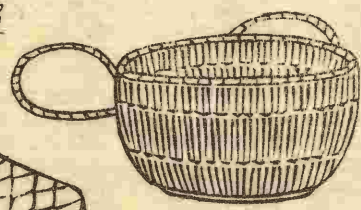
と身ごと種はあげて
 羊たをふ漬の自陰せ
 喘とて

養蚕法道具此事

中蚕の法道具の圖の如くして
 用ふとて又その他を
 菜を新みけるも
 かり乾燥して



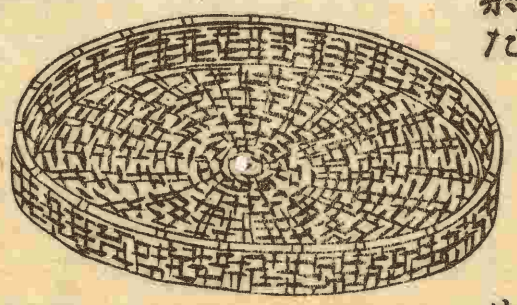
細袋



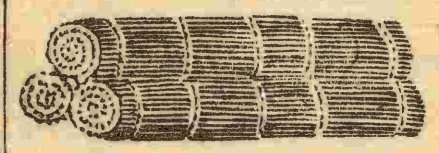
日



日



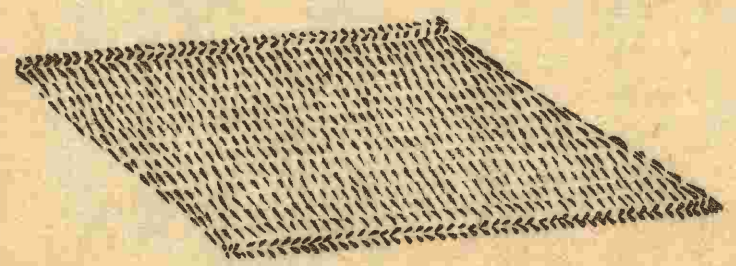
蓐



薦



薦

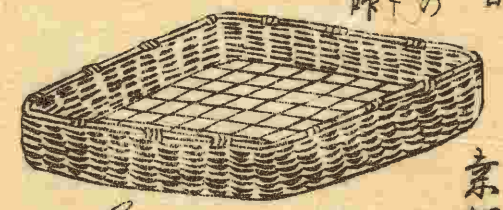


蓆

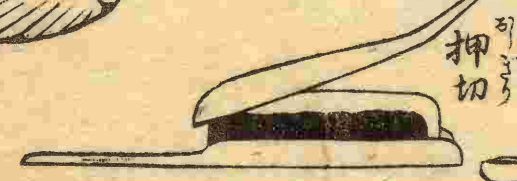
篩の目五目 篩の目八目



箸



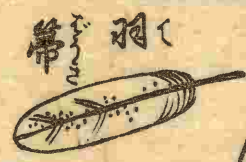
八目



押切



京切庖丁



羽



羽



採菜籃



箕



蕘



蕘



白箒

養生も出ず時を得の事

春ふゆの其年先かふふとんと思ふ種を彼者の
中目前後に取出し氣の籠らぬ格なり氣通
とぬもれ所へ均並し是も其土地のを暖く
運来し加減あり種と下へ糸とはあて一日
留り又と下と均並し其力へは二階裏など
上中わつたれども温冷の遠ひわりて種の上
に

なりたる所へ早く青を巻け申し出るなり免
角一極ふかり巻も一皮ふたりと出ふかりに加
減と云ふる肝要なり何ものそしあはる八十八
夜前後あり養生も出るなり此と死ありことと
目の思ふ處又並し或の懐中へ入るる巻者
筒圍ふはとわつひの火の通所又並し巻また
ひ紙暖かぬ理ふ出さんとする事甚し

天性自然不汚せて種又皆青き法を蚕かき
出かすらば蚕此九つ月の後なる時を以て種を
取りし白紙の一枚程あり是をほくみ或は皮籠
又骨柳指の物を入りし火氣の行暖かき所上
おく木しけ時水氣又觸ると悪く為ぬ天かき
家内又土を焼きかり温まると悪く為ぬ糸の
うゝ悪く自りる本焼くうゝ又迎前と燿

草春ぐうぐに扱ふ事も悪く蚕と子楮
糸後毎又糸をわくは法淨まると法道具の蚕
出かすは掃除して燥く悪く
最初楮と以て蚕掃灰仕法と事
蚕の袖より桑の葉をとりて書ふもの極れども
書蚕出か付首を固くしむと桑の芽出さ
る事其時の掃き桑は乾と取蚕ふ吟を

雨の元来 椀とひ素の美を 種又成と云
 蚕の食するの素のわが花とあざし 雲紗かひこ
 掃りとは付らとよくわらひ 彼素丸の露なく
 よく煙きたる成らふとくわのこり 細くは是
 と法藤しきま 箕のくごみと去り 種一枚
 の籠お椀又ひ合さう 用をよまじ 扱き殺の蚕
 中方もおしとらん ぐの扱方 椀を合用意

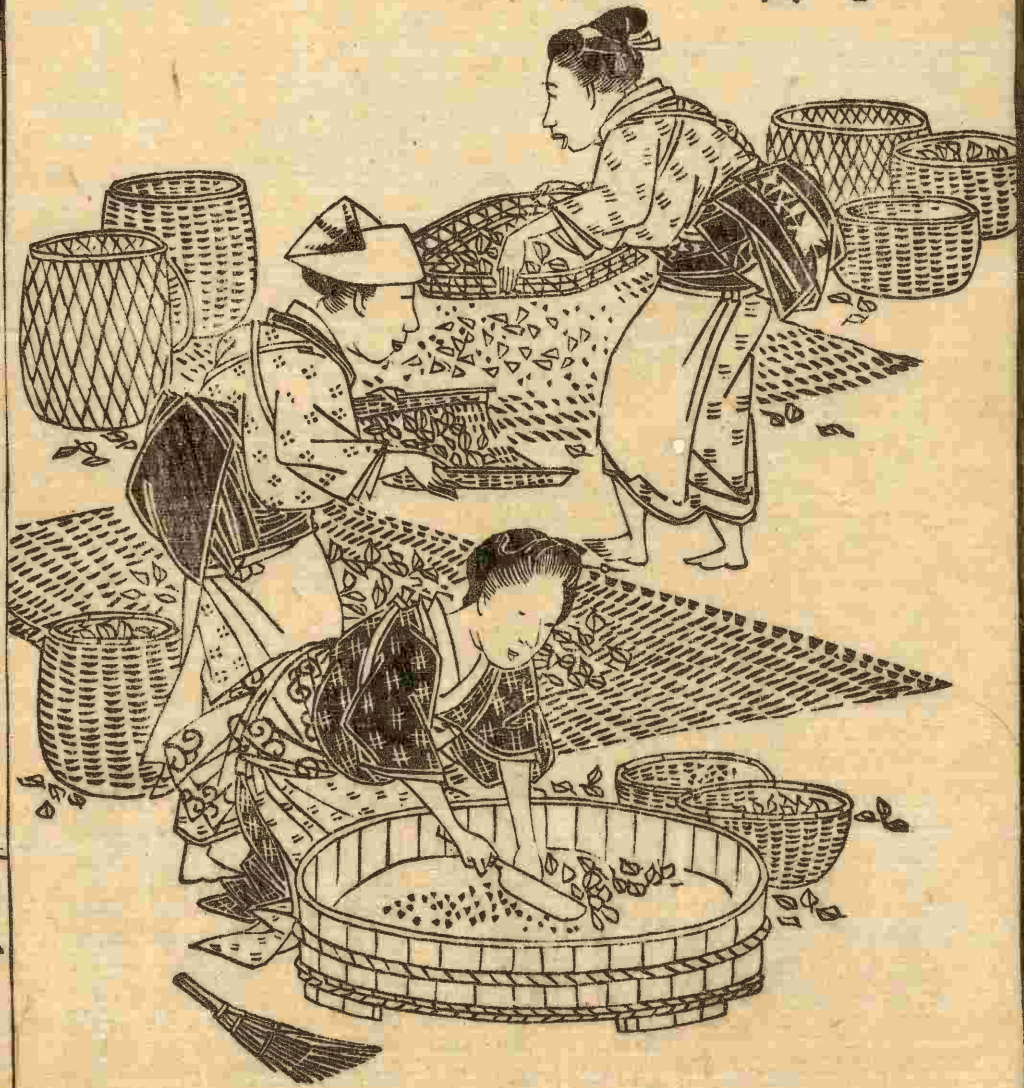


生れ々蚕糸あふ
 見合右様と
 りて用意せ
 糸の隙は
 歩留り目後と用
 今相宜乃付
 小彼色一蚕と



取也一何の筈あても底より早稲のとりねらと徒
 程ふ人合ありて其上紙と皮彼うらへて
 又の切糸あても筈は底より糸其うらへて
 うらへて蚕種紙の皮場成りて拵かこのうらへ
 うらへて細さ箸とよりとあつてふはりくとたき
 筈の中へ蚕とねらとせし或の皮時ぐんを
 糸と拵ねらと其日の夕方ふ皮ぬかをと拵ねら

桑
久
図



桑

図



十

組馬丹波丹後
蚕柵の番



何れも救ふ取合
蚕と蚕をれ合柵
蚕を了初日柵か
一日ふ致と夜冷せ業
の切葉かを一日ふ
み夜冷とく是も
雨あけり此か減あ

夫よりや暖なる所へとて並し柵の立所は
新種ふと並冷し初日を暖なる所とて並置
さ月あけし冷し業を此かうのそとて加
減とて業の養わぬ一付とやく業と養は
業は業切柵へ並置を歩方行ふはと養を
了と余の蚕成長とてふ人合後けとあ
のちの柵開とて也との仕法あり各其宜

しん不随来しまより一日ふ或度づ先の烟さ
著少く春中と切度ぐ今春の居うと乾
くかびか来ざるな春仕法より毎日葉と行
きふ家前又葉とより春の原さく西の橋さく
た配り葉と後葉とむらたれ極ふゆう多喰
すべしあぬ天續さ春中あありまらば春の
うふあまきいともゆをせり死むるぐと今

かゆときて虫ふ葉と喰とぐ是も春中と燥さ
んがたぬあう春中て夏日の間を暖の加減別
て大切より是より七八日の折に入わく是が後
色くは病をかふあり又切候のとき山内来む一
向葉成喰と又春消死とて知れまら又
暖さあも思ふ兼て八方へ風のさく寒吹く
並び時戸の閑あ自由中けく雲のかよひ成

足が臧どきき申す之を大方向の又其の
さうなるううしく春の病を来性悪くある
夫とは去る後より俄に悪くならし極
う病入るわぐ人身後の不化をあたなりと心
得る陽氣加減を察しに遠ひる能く
考わあぐ

籍に大小山集ざる心持の夏

春掃病する時鍋の尻を見あぐりあふか
ゆる程厚くする才性悪くならぬ極えある能
一切の化ものよても厚く極れをよるは其の
忍まらぬ一日よる度漸く二分程業と云ふ故大
方此子入るわき業此より極極あもむしつありて
疎果なるい春の性悪く故大小不持なる之
を心持あぐ春育せば中々仕持ド有る故

ありえらるる蚕る情を納る靈其を尋る
 の虫と遠の其處を去らば居る衆も我も
 小来まが喰来らざるを彼方歩方歩
 卑く育つ虫小あはけ理を考陸分筆と
 付素此宛に振替むるに極小と長し其中
 心は布にた蚕も有まが又大振放蚕も長
 彼等飼ふも付の達者なる蚕弱と蚕の上等

素以喰ふ故下母及まが弱と蚕を桑喰ふと
 わらわだ志のとりとよ不放りし蚕外行と倍
 改を織と居ふとある蚕の十分業を喰ひ下
 ぬまが海喰とどう人なる蚕漸印の付下
 たる蚕桑と尋ねども多りよ上なる蚕喰を
 標と水沙り糸は皆あやま彼是と内付別
 色と弱と蚕の飢ふ及あまらけ付達者ある蚕

弱き蚕二極取わす養育せば一觸ふたり
仕換ぐわす事外弱き蚕も速くんに成あり
弱取より多されが是は極は根木山と後く六々
成なる以然く心付なり

蠶獅子は居起り入道の事

養掃立より七日の頃葉を喰止む色白く
頭ぬく成る是と獅子は居体とのよび

早く居裏と取替てう相の初め付る居裏
立替んと思ひて昨日は夜葉喰とまへよあのど
く又端れよりわらの細なると蚕のうへは落くふ
し速く葉の切粉とあり掛り然り付る蚕皆
と成葉に遠よりたうて夜葉を喰せく居れ
ゆく居裏を替ぐはけ付る縁通ふ居るふ
蚕の中ふ並今もど中通ふ蚕と今度

縁ふ並又今を
 柗のよふ並ふ
 中柗よ
 と柗ふよけ
 是は柗のよ
 陽氣か減遠
 たり形はぬく



江流約柗の園

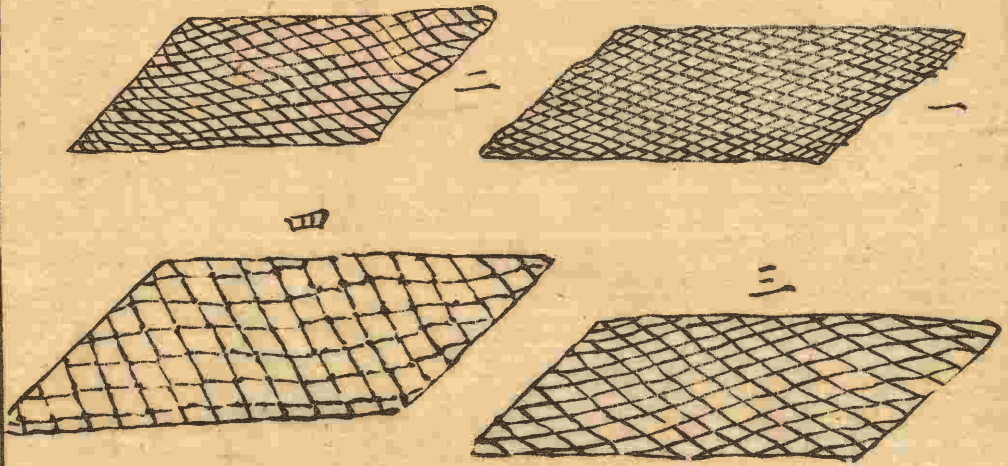


套菓子のは
 長瓦
 丸図

その人といふが蚕一調ふ能揚ふたりそとみこ細蚕椰子
此体と身之の業地一日ふ六夜方のかき最さい
くわふふは是地糸ふはる責業とふあか新のどくと
不付蚕業此中に眠り居て業と冷熱ととも
是と操と業と冷切らるる肉ふ責うけりあり
拭くべし責業を食ふる付ん蚕不操ふたり
今一幼もる肉ふ歩に眠し蚕のとたる皮と

脱出ふは是代糸とはとぞん糸と眠ぎ業のうへ起り
上るひ起りし蚕人へか出ふ業とあり止む
不付大方速き蚕ととひ責業と仰掛
ば先文記よりし蚕業冷ふらりむ登る蚕
ハ漸居眠ふたりふと依業業と止るゆえ先に
起りし蚕或は度り責業と冷む肝心の冷
盛のよりある蚕のあか食止あふ多ふゆえ

蚕の網の図



きに痛むて度夜の起癒皆あめ止め業れ
 ちる遠より蚕小大小業本色々此病ひ方
 て大切の事ありけ侍あり網あて蚕網と云
 物とはくくは網の教習程用言く蚕の大
 業見合後程用行くと用ひ網のき方
 蚕に半眠て頃蚕の上は網成る業の
 業る網の目と波ぬ程不接あるとよ物りか

業をて一初れごとと進ば
 眠て蚕のちよとくと居る
 眠ざり居る蚕の網の目と
 澄りとあたる業またり業
 成食をうけ付網の厚方と
 物とふ何なりし居る蚕成
 糸の巻へより責みけく

桑と喰まじし中は涉りし眠蚕をわし暖ある
まゝいあしよげ記りとふ振ふまじく形のごとく
まゝの付のおそ死蚕も子も盤も一調ふ能振ふ
なぐほ夜の居紀右不何れ先角一振ふ振ふ
うに筆を付べし右の烟とありて振ふ付の産
の眠蚕を喰ひ振ふひ振振ひふも入らず歩
州なる長し平生は分たる飼ふとて一葉飼にまれ

ひ出小くしと繭の山をわし長しはる小籠が
糸細く糸はよふくしと縁同くありて分法
のふ素と食せし蚕は中る大なりありと糸は味
まじくあり

繭紙作らば仕極く中

叔蚕歩らば盤も糸のこく透り紙ふ振ふ
なり繭をわしんと桑原をわしとわしね歩むと死

出くふるまの仕りす仕
 振色とやうくくも
 丹波丹後徳馬田菜
 藪の枝と柳に間ふな
 うへ並に間ふ登と入
 おのまは候ふまの仕り
 又新ふ登電りたを



外へそりやう暖なる所へ上げあへ並に海もと
 つくしとありまより二首めあ身わあとな藪
 成りけ風と入藪の湿りと乾とあり又江別
 二階裏より縄と二物づはうけ縄おあなま
 竹の管成通一香の柳と釣りやげ並葉登と
 した柳の薦と柳本もに上げ下草自由
 とあなう又まの仕りす仕り柳お葉とく

中此頼成りあ出ざる程ふとどく又あ天ならんば
 早く炭火をさかす煖煖ふりれ中の踊といふ
 ぬ出さふ程ふとどく

線取極く事

蚕とぞに繭と成る日同く糸成る長き
 固く糸を流儀多しといふも先江戸列の線
 取女の左の方へ電灯と人端の湯煮たがふとん

まるま糸糸とほ又後線
 湯へいさ加減よく煮たる
 と糸箸成りよく煮ゆ
 せ糸口とあひぐくそり
 事めん糸傍ふ直儀さ
 程りち獲ふ巻付る丸
 わくへ固のおとく右の糸



丹波丹後
 糸とる圖

いづくも糸は細く

なる皮母おわぐ

取海とむらたれ

振ふ毛付のなる又

まひの條のほをたれ

と糸はよわく又煮

えれど糸は出ば是ふ



繰車おろがあて
糸繰いとくふ番

加減うけんありて

繰取くるとり仕法しほう流儀りゅうぎ多

し宜よろしとめりちゆ

べく又糸いと野のあまも

深車かほぐるまこれにこゝに國くに梨なし

よみてよみて色いろく仕法しほうあ

まとの人ひととも先まへ一方ひつ



糸いと
圓まる



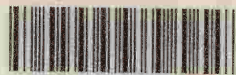
と園づふわれんと又また糸いとととままるる仕し振は程ぢ又また園ののの後ご
そのととも
 りりわわままじじぶぶとと新しんふふああままががひひ写うつとと成なりりりああももべべと
よれれとと今いま一ひと方かたととわわげげとと園づふふ何なにとと以もてて餘よりり餘よりり無なききれれが
まままふふとと申まをすすと

夫ま綿わた仕し立た振はとと事こと

夫ま綿わたのの線せんにに取とりりがが死し繭まゆ成なり振はりり是これとと灰はい汁じゆ
あままとと能よくく生なままととりり水みづをを漬ひききてて灰はい汁じゆとと申まをすす

小野寺文庫

群馬県立図書館



0499570-0